

じんけん瓦版 第72号

発行日：2019年2月10日

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

第6回韓国社会宣教スタディツアー 報告

キテクレタカラウレシイ

旭川聖マルコ教会牧師 司祭 ミカエル 広谷和文

1. 「冬に記す秋の印象」

雪が降りやまない。街も繭に包まれたかのようにしんとしている。こんな白一色の世界に埋もれていると、つい2か月半前に歩いた韓国中西部の印象がいよいよ鮮やかによみがえってくるのである。この旅行、正しくは「第6回韓国社会宣教スタディツアー」の詳細な報告は、すでに「日本聖公会管区事務所だより」に総主事の矢萩新一先生が書いておられるので、それをなぞることはせず、心に残る思い出のいくつかを記してみたい。「冬に記す秋の印象」とでも言ったところだろうか。

2. 大きな田んぼ

大韓聖公会の宣教を特色づける「ナヌメ・ジプ」（分かち合いの家）運動に学ぼうと始められたこの企画。これまではソウルとその近郊を中心にしたプログラムが多かったらしい。今回は、フィールドを韓国中西部の大田（テジョン）教区に広げて見学や交流などを行うという。こういうチャンスはもうないかもしれないと思って参加した。ほかの参加者も同じ思いであったらしい。ただスタッフを除く参加者は5名。これではかなりもった

いない。どこか大陸的な趣のある大田は、韓国のほぼ中央に位置することから交通の要衝として急速に発展を遂げてきたが、かつては大田（大きな田んぼ）という地名が示すように、のどかな田舎であったという。それだけに、急速な近代化の過程で、社会的な矛盾も集中的に生じてきたのだろう。そこに、「ナヌメ・チプ」（分かち合いの家）の果たしている大きな役割があることはよく理解できる。

3. まけてやれ

いろいろな事情を抱えた青少年のための支援センターを訪ねた。ケースに応じて、超短期、短期、中期、長期という期間別の支援施設に分けられている。「中期」の施設で、木工品を作っていた少年たちと言葉を交わした。短い時間ではあったが、互いに顔も覚えた。その日の午後、市庁前の公園でフリーマーケットが開かれていたので覗いてみると、昼前に会ったばかりの少年たちが木工品を売っていたのである。木の枝に十字架を張り付けた小さな置物があった。10,000 ウォンだと言



大田教区スタッフ（後列左の二人）とともに
後列右から2人目が広谷司祭
（大田男子中長期青少年センターにて）



大田青少年短期シェルターに保護された少年たちが
大田のプロ野球チームから折れたバットを貰い受けて
それを加工し、ペンや十字架などの木工品を作って
フリーマーケットに出店していた

うので、払おうとするとリーダー格の少年が、盛んに「まけてやれ」と言う。彼らが何か話し合っ
て、結局 8,000 ウォンでいいということになった。
午前中に自分たちの施設に来た「顔見知り」の日
本人に精一杯のサービスをしてくれたのだろう。
手元にある十字架を見るたびにあの少年たちの顔
が浮かんでくるのである。

4. 「ニホンニハクルシメラレタケレドモ、キテ クレタカラウレシイ」

大田教区での最終日、列車に乗って南西へ1時
間 20分、キムジェ

という町へ行く。日曜日の礼拝に出て、ここにあ
る高齢者のための「ナヌメ・ジプ」を訪ねるため
である。この町は、白村江に近い。その北にはプ
ヨがある。百済の故地なのだ。胸を躍らせながら、
聖餐に与り、お昼をご馳走になり、高齢者の施設
に向かった。一通り見学した後、帰り際施設のス
タッフに呼び止められた。「日本語を話せるお年寄
りが話をしたいと言うので・・・」と言う。見る
と車椅子に乗ったおばあさんが一人、おじいさん
が一人おられる。おばあさんが勢い込んで話そう
とするが遂に日本語は出てこなかった。こちらが、
おぼつかない韓国語で何か言ったらしっかり手を
握ってくれた。今度はおじいさんが私に言った。
「ニホンニハクルシメラレタケレドモ、キテクレ
タカラウレシイ」。そうはっきり言って何度も手を
握って別れたのである。「ウレシイ」と言われて私
もうれしかったけれども、あのハラボジの心の中
に、本当はどんな思いがあったのだろうか、今も
そのことを考え続けている。

5. 龍山

大田の駅を出た列車は、ソウルの龍山（ヨンサ
ン）駅に着く。タクシー乗り場に向かう途中、こ
こに徴用工の像と碑があったことを思い出し、ど
こだろうかと探してみると、タクシー乗り場のす
ぐ近くにその像はあっ



龍山駅前の徴用工象

た。この国から多くの
人が、日本へ、北海道
へ連れて来られたので
ある。北海道で亡くな
った人も多い。かつて、
若い人たちと一緒に、
旭川近郊のダムや遊水
池の飯場の跡を掘り返
したことを思い出す。
その時は、一体の遺骨
が掘り出された。目の前の徴用工の像は、その記
憶とぴったり重なった。龍山駅の徴用工の像の前
に立ったのは 10月 28日。何とその 2日後の 30
日に、韓国の最高裁が新日鉄住金に対する元徴用
工 4人への賠償を命じる判決を下したのである。
その後の日本政府の居丈高な対応は情けないとし
か言えないものだった。かつての軍事独裁政権と
の都合の良い取引によって、日本の犯した罪が帳
消しになることはあり得ないし、そうさせないこ
とは私たちの責務であろう。このスタディツアー
で学んだことは多いが、何よりも私たちが謙虚に
生きると言うことがどういうことかを改めて考え
させてくれる時であったと思う。

守大助さんに手紙を

仙台北陵クリニック筋弛緩剤
えん罪事件で、再審請求を戦っ
ている守大助さんに、ひとこと励ま
しのメッセージを送ってくださ
い。

[宛先] 〒264-8585

千葉市若葉区貝塚町 192

僕は一人じゃない

僕は一人じゃない どんな時も
いつだって 僕には 支えてくれている人達の
温かい 心強い 優しい声がある
どんな時も 諦めずに 前へ進む
悔しくて 辛くて
悔しくて 泣いた日も
僕は一人じゃない どんな時も
全国に支えてくれている 人たちがいる
負けずに闘い 前へ進む
僕は一人じゃないから！

(守大助詩文集より)

世界エイズデー（12月1日）の近い日に、人権委員会は、カトリック中央協議会 HIV/AIDS デスク、宗教と LGBT ネットワーク、ルーテル HIV/AIDS プロジェクトと共催で、「世界 AIDS・DAY 記念礼拝」を捧げています。昨年は、24回目で、11月25日に牛込聖公会聖バルナバ教会で祈りと交わりの時を持ちました。礼拝の中で、パートナーをエイズで亡くした経験のある方からメッセージをいただきました。要約を寄稿いただきましたので、以下に掲載いたします。



「カトリック HIV/AIDS デスク」ロゴ

「カミングアウトについて」

大塚隆史（造形作家／バー・タックスノット店主）

僕は新宿三丁目でバーをやっています。たった9席のカウンターだけの小さなバーで、お客様はゲイ男性が9割以上を占めています。僕自身もゲイで、開業して今年で36年になります。僕には、このバーと一緒に開いた当時のパートナーを1989年にエイズで亡くした経験があり、お客様も皆そのことを知っています。バーでは深夜になるとお客様と僕が対一の状態になることがけっこうあるのですが、そんな状況で、お客様からHIVの感染をカミングアウトされることがあります。HIVに対する知識が広まってきたとは言え、いまだに偏見や否定的な感情が巷にあふれている現在の状況下では、まだまだ感染の事実を他人に話すのはハードルが高いのですが、僕の経験を知っているので、他の人に話すよりは話しやすいのかもしれない。今までに、ずいぶん大勢の方からカミングアウトされました。当然、お聞きした話はその方だけとの秘密になるので、他の人に伝わっていくこともありません。結果として、カウンターの中から見渡すと、その場に居合わせたお客様が全員感染している方で、そのことをお互いには全く知らないという不思議な状況になることもあります。それは、HIV感染者を支え、HIVの正しい知識を社会に広めるためのスローガン「We are already living together! (僕たちはすでに一緒に生きている)」を実感する時でもあります。

「カミングアウト」という言葉ですが、最近では「自分の秘密を他の人に打ち明ける」という意味で使われていることが多いようです。その軽い扱われ方に、僕は違和感を感じています。カミングアウトとは、ゲイリブ（ゲイ解放運動）がアメ

リカで培われていった1970年代に生まれた言葉で、当時のゲイリブの中核をなすような重要な思想だということあまり知られていません。英語の表現で「家族の秘密はクローゼットの中に隠し



大塚隆史さん

ておく」という言い回しがあり、そこから同性愛者が自分のセクシャリティを隠し続けていることを「クローゼットの中にいる」という表現していました。ゲイリブが盛んになる中で、隠れ続けている限り、自分たちは社会に存在しないことにされてしまうと危機感を感じ、そこから、クローゼットの中から出てくること=カミングアウトが必要なのだと説き、運動の中核に置いたのです。

僕は高校生くらいの時に、幸運にもアメリカのゲイリブに触れる機会があり、その後の人生にものごく大きな影響を受けました。当時の日本では同性愛者と言えば、変態であり、精神疾患であり、欠陥人間だと思われていました。多感な時期に、自分が同性愛者だと受け止めることなどお

よそ難しい環境だったのです。そんな環境の中で、ゲイであることは何一つ恥じる必要のないことだ、プライドを持って生きようと説くゲイリブは、僕を暗闇から救い出してくれた光明の思想でした。その考え方では、カミングアウトとは、単に同性愛を秘密にして生きていく重圧から逃れる方法という消極的な意味ではなく、自分のセクシャリティを受け入れ、自信を持って生きていけるようになるためのプロセスを指しているのです。

もう少し詳しく説明しますと、1) まず自分が同性愛者であることを認め、受け入れること。2) それが可能になった段階で、それを他の人に話し、受け入れてもらえるようにコミュニケーションをとること。3) 他者に受け入れてもらった体験をフィードバックさせて、自分のホモフォビア（同性愛嫌悪）を小さくしていく。4) ホモフォビアが小さくなっていくに従い、より多くの人に知ってもらい、受け入れてもらう。5) そしてその成果として、必要とあれば社会的にも明らかにしていく。こんな段階を踏んだプロセスのことなのです。

ここで重要なのは、基本的にカミングアウトとは良い関係を作りたいと思う人に対しての行動なのです。そのカミングアウトの結果、相手がそれを受け入れてくれると、その受け入れてもらった

経験を、また自分自身を受け入れる力に変える。こういった双方向の流れが大事なのです。カミングアウトは相手を試しているのではなく、「あなたと良い関係を築いていきたい」という気持ちの表明です。もしセクシャルマイノリティの人が親にカミングアウトするとしたら、親と良い関係を再構築したいという意味であり、その人が社会的にカミングアウトしたいと思っているのなら、その人が社会と良い関係を持ちたいと願っているということです。そこが理解できれば、カミングアウトされた人は告げられた事実だけに意識を向けるよりも、「そうか、この人は自分を信頼し、良い関係を望んでくれたのだ」と思うことが正しい受け取り方なのです。これは、セクシャリティに限らず、HIV感染のカミングアウトでも全く同じことが言えます。

僕はゲイであることを受け入れて生きていくために、ずっとカミングアウトをしてきました。そしてパートナーをエイズで亡くした経験のお陰で、たくさんの方からHIV感染をカミングアウトされてもきました。する側される側、どちらも経験してきた立場から言えることは、カミングアウトは基本的にお互いの間に信頼関係を作り出すための共同作業でなければならないということです。

~~~~~

## 2018年度人権文化セミナー連続講座・第4回

### 世良田村襲撃事件フィールドワーク

～ヘイトスピーチをなくすために～

日時：2019年3月23日（土）9：50

東武伊勢崎線「太田駅」集合

場所：襲撃の現場及び世良田行政センター

参加費 人権委員会が負担します 定員 25人

\*お弁当は各自ご持参ください

申込み 人権委員会へ名前、住所、電話を明記

メールで [k-sasaki4539@kbd.biglobe.ne.jp](mailto:k-sasaki4539@kbd.biglobe.ne.jp)

または、fax 04-7153-4539

#### 1.フィールドワークコース

- ①八坂神社、白山神社、父方、母方神社
- ②普門寺 ③長楽寺、子方神社

#### 2.講演・質疑

- ①東毛地区を概観する… 安田耕一
- ②世良田事件とは何か… 松島一心
- ③国連人種差別撤廃委員会で上映した映像
- ④世良田村事件に学ぶーヘイトスピーチ  
… 佐藤信行

主催 日本キリスト教協議会部落差別問題委員会